

4.

特別招聘教授 プロジェクト

2018 年度特別招聘教授 プロジェクト概要

- 1) ジャン・バーズレイ特別招聘教授
- 2) デルフィーヌ・ガルディ
特別招聘教授

▶ 2018 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

領域・文化横断的なジェンダー研究の知見の共有

「特別招聘教授プロジェクト」の主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただき「国際的研究拠点」としての研究所の総合力を向上させる重要な事業である。2018年度は、**ジャン・バーズレイ氏**（ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）、**デルフィーヌ・ガルディ氏**（ジュネーブ大学教授）の2名を招聘した。

近代以降の日本の女性表象研究を専門とする**バーズレイ氏**は、舞妓表象と冷戦初期の女性表象についての研究プロジェクトを進めている。舞妓表象研究については、その成果の一部を、IGS 英語セミナー「Millennial Maiko: The Geisha Apprentice in Japanese Popular Culture（ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像）」で発表してくださった。国際シンポジウム「Arab Women and Transgression: At the Boundary of Good and Bad（アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で）」では、女性が社会的制約を乗り越えて、身体表象などの形で声を上げることをテーマにした企画をしていただいた。大学院講義「Chasing Madam Butterfly: The Gender of Japonisme（『蝶々夫人』を追いかけて：ジャポニズムのジェンダー）」では、女性表象を研究テーマとする学生に対し、熱心な指導をしてくださった。

歴史、社会学、ジェンダー研究を専門とする**ガルディ氏**の研究プロジェクトは、これまで欧州の事例について進めてきた研究の進展として、日本における議会の女性排除をもたらす文化構造を研究するものである。フランスおよび英国議会についての研究成果については、国際シンポジウム「Who can be a Representative? Engendering Legislative Bodies: Lessons from the French Historical and Political Context（議員になれるのは誰なのか？ フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化）」で発表して下さっている。また、IGS 英語セミナー「Bodies, Collective Action and Democracy: Engaging with Judith Butler's Work（主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討）」では、2016年刊行の共編著書の内容を基に、ジェンダー研究分野で特に重要とされているジュディス・バトラーの理論を取り上げた講義をしていただいた。

2018年度の特別招聘教授プロジェクトにより、特に、ジェンダー研究という学問分野の意義と、日本における国際的研究教育拠点としての本研究所の存在意義を再確認する機会をいただいたと思う。両氏が講師や企画を担当したセミナーやシンポジウムは、いずれも、領域横断的というジェンダー研究の特性や、文化横断的という国際性を備えたものである。そうした特徴は本研究所の事業が目指すものに沿っており、同様の方向性でジェンダー研究・教育に取り組む海外の研究者が、招聘に応じてくれる要因となっていると考えている。

1) ジャン・バーズレイ 特別招聘教授プロジェクト

【ジャン・バーズレイ 特別招聘教授プロフィール】



ノースカロライナ大学チャペルヒル校アジア研究科アジア学教授（日本史）。カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士（東アジア言語と文化）。研究分野は日本の女性像とその表象である。『冷戦期日本の女性とデモクラシー』（ブルームスベリー学術出版、2014 年、英語）をはじめ、著書多数。『日本の「青鞥」：1911 年から 1916 年までの「青鞥」の新しい女のエッセイとフィクション』（ミシガン大学日本研究センター、2007 年、英語）では、2011 年の平塚らいてふ賞（日本女子大学）を受賞。また、ドキュメンタリー映画 2 本の作成にも携わるなど、広範かつ大変優れた研究実績を有している。また、アジア研究学会（南東部）の会長を務め、多くの学術誌編集に編集長や論文審査員として携わるなど、学術界への貢献度も高い。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

ジャン・バーズレイ博士の専門領域は日本学研究で、これまで日本の近現代の文化、社会、女性に焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近年の日本における女性の表象に関する著書と論文では、日本学研究者のみならず、ジェンダー研究者や社会学者からも、日本社会における女性の活躍についての理解を深めることにつながったという高い評価を得ている。バーズレイ氏は日韓米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、バーズレイ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものである。バーズレイ氏には 2017 年にジェンダー研究所が主催した国際シンポジウムにおいて基調講演者として登壇していただいた。このシンポジウムに参加した学生・院生及び学内外の研究者に好評を博した講演であったことから、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】 2018 年 8 月 2 日～2019 年 7 月 31 日

【職務内容およびその支援】

バーズレイ特別招聘教授に依頼した業務は、下記の 5 項目。ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援および研究補助を担当。

- 1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
- 2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
- 3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
- 4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
- 5) 上記活動についての成果報告

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施：書籍刊行プロジェクト 2 件

①舞妓表象研究『Maiko: Imagining Geisha Girlhood in Japan』 カリフォルニア大学出版（近刊予定）

- ・2018 年 8 月から 2019 年 2 月にかけて、全編（7 章）の原稿の第 1 稿を書上げた。
- ・本プロジェクト成果に基づくセミナーを 2019 年 2 月 8 日に開催（本学院生、研究者対象）

②50 年代冷戦期の女性表象『Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan』

- ・ファッション史資料の調査を実施した。

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総司会登壇

■国際シンポジウム「アラブ世界の女性と逸脱：グッドとバッドの境界で」（2018 年 10 月 14 日）



現代のアラブ社会の若い女性たちが、女性であることによる社会的制約をどのように乗り越えて、自分を表現することに取り組んでいるかに焦点を当てる内容。ノースカロライナ大学チャペルヒル校のナディア・ヤクブ教授とギルフォード・カレッジのディヤ・アブド准教授を基調講演者として招聘。聴衆を交えてのディスカッションでは#Me Too 運動への言及もなされ、日本において女性が声を上げることの難しさなどについて活発な議論が持たれた。米文学を専門とする本学の戸谷陽子教授のコメンテーター参加を得、学内の研究者との連携を強化すると同時に、人文学分野への研究ネットワークの拡大を図ることができた。



[参照:本報告書 45～47 頁]

3) 大学院生対象の英語によるセミナー講師

■IGS セミナー「ミレニアル舞妓さん：日本のポピュラーカルチャーにおける舞妓像」（2019 年 2 月 8 日）



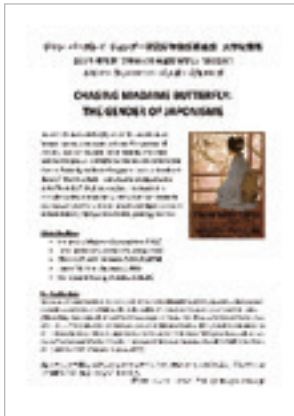
書籍執筆中の舞妓表象研究の成果に基づく講義。21 世紀の現在、舞妓は、その「カワイイ」姿が人気を集める京都のイメージキャラクターとなっているが、1950 年代には、身売りや売春という暗い影を持つ存在であった。そのイメージの変遷を、1950 年代と 2000 年代の映像作品の比較により分析した。参加院生の専攻はジェンダーや比較文化など様々であり、専攻の枠を超えた議論も持たれた。日本語の映像作品のセリフの英語訳を自ら手掛けて配布資料にまとめるなど、講師の研究の手法や研究対象に向き合う姿勢について知る機会にもなった。



[参照:本報告書 71～72 頁]

4) 大学院講義

■博士前期課程対象「Chasing Madame Butterfly: The Gender of Japonisme」(2018 年度後期)



博士前期課程共通科目「男女共同参画国際演習 II」[18S0260]を担当。『蝶々夫人』を主題に、西洋文化における日本人女性の表象についての知識を深め、研究者としてのスキルを身に着けることを目標とする内容。文献講読と演習を中心とした、英語による講義。登録は聴講1名であったが、履修登録外の聴講を含めて4名の学生がほぼ毎回出席し、課題を提出した。学部生から博士後期課程生まで、かつ、英語スキルのレベルも異なる学生たちであったが、そのひとりひとりに対し丁寧な指導をしていた。

【プロジェクト成果】

2018(平成30)年度のジャン・バーズレイ特別招聘教授プロジェクトは、特に教育面で大きな成果があったと言える。大学院講義「男女共同参画国際演習 II」には、その主題であるジェンダー表象について、高い関心を持つ学生が集まった。その熱心な講義参加の姿勢に、バーズレイ氏も驚きと称賛を表している。そして、バーズレイ氏の熱意溢れる指導の姿勢も、その成果をもたらした要因である。受講成果が、それぞれの学生の学位論文などに、どのように表れるかも楽しみである。

2018年10月14日開催の国際シンポジウムは、バーズレイ氏の共編著書『Bad Girls of Japan』(2005年)に触発されて執筆編集が進められた『Bad Girls of the Arab World』(2017年)の編著者、執筆者を招聘しての企画であった。研究者同士の交流やネットワーキングが、新たな研究成果を生み出すということが顕在化された企画であるといえる。そして、本学の戸谷陽子教授やジェンダー研究所の研究者が議論に加わったことで、新たな研究者同士のつながりが生み出された点も重要である。また、討論の際には、社会人の参加者からの発言が数多く聞かれ、ジェンダー研究所の事業成果が、生涯学習の場を提供する形で社会還元されていることを確認できた。

研究については、表象研究という人文科学分野の研究プロジェクトが加わったことで、ジェンダー研究所において実施されている研究の学際性を向上させる成果をもたらしている。この点は、先に述べた大学院講義および国際シンポジウム、バーズレイ氏が講師を務めたIGSセミナーにも反映されている。バーズレイ氏のセミナーなどで人文科学系の研究視点について学ぶことは、本学のジェンダー研究そして教育の質の向上につながるものである。8月からの数カ月の間に、舞妓研究の書籍1冊分の手稿を書き上げる精力的な仕事ぶりは、研究所所属の研究者への大きな刺激ともなっている。

バーズレイ氏は、ジェンダー研究所が刊行する学術雑誌『ジェンダー研究』の編集委員の任にも就いている。ジェンダー研究所やリーダーシップ研究所が企画するシンポジウムやセミナーにも積極的に参加しているほか、所属の研究者やスタッフともよくコミュニケーションをとっており、研究所そして機構全体の活性化の源にもなっている。また、所員が作成する英語の文章のチェックを喜んで引き受けてくれるなど、協調性や協働意欲が高く、着任後早期から研究所の一員として事業活動に深く関与し、研究所事業に貢献している。

2) デルフィーヌ・ガルディ特別招聘教授プロジェクト

【デルフィーヌ・ガルディ特別招聘教授プロフィール】



ジュネーブ大学教授（現代史）。専門分野はフランス史と社会学。ジュネーブ大学では 2009～2017 年ジェンダー研究所長を務めたほか社会科学研究院副院長も歴任。パリ大学などの高等教育機関にて研究・教育職に従事したほか、マックス・プランク科学史研究所およびベルリン高等研究所、パリ高等研究所フェローとして研究実績を積む。研究関心は、社会史・ジェンダー史、フェミニスト理論、ジェンダーと科学技術、科学技術社会論、インフォメーション社会史、議会の歴史と人類学研究など。代表的著作に、ジェンダー視

点からフランス議会史を考察した単著『ブルボン宮殿のリネン：民主主義の時代における身体、物質性とジェンダーの政治』[仏語]（2015 年）、共編著による、ジェンダーと生物医学、セクシュアリティをテーマにした『欲望の科学：女性のセクシュアリティの精神分析から神経科学まで』[仏語]（2018 年）、フェミニスト理論・社会理論をテーマにした『協調の政治：ジュディス・バトラーと社会運動について考える』[英語・仏語]（2016 年）がある。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

デルフィーヌ・ガルディ博士の専門領域は、歴史、社会学、ジェンダー研究で、これまで、フランスの政治や企業における女性の表象などについて、歴史・社会・ジェンダー視点から研究を展開し、多くの著書や論文を含む、優れた研究実績を有している。特に、2015 年出版の著書『ブルボン宮殿のリネン：民主主義の時代における身体、物質性とジェンダーの政治』では、学際的な観点から、フランス政治における男女格差を指摘しており、西欧研究や政治学のみならず、様々な分野の研究者から高い評価を得ている。ガルディ氏は、西欧および米国の研究者とのネットワークも確立しており、本学において、ジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが期待される。また、ガルディ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものであり、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】 2018 年 12 月 1 日～2019 年 1 月 31 日

【職務内容およびその支援】

ガルディ特別招聘教授に依頼した業務は、下記の 5 項目。ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援を担当。本学博士後期課程ジェンダー学際研究専攻院生が研究補助を務めた。

- 1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
- 2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
- 3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
- 4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
- 5) 上記活動についての成果報告

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施

■議会文化のジェンダー化についての国際比較

儀礼、空間、建築、象徴などの議会文化と、ジェンダーをめぐる議会環境が女性の存在にどう影響しているかについて、欧州での研究結果を日本の状況と比較する。仏語または英語で発表されている関連文献講読と、衆参両議院の傍聴、議場見学、憲政記念館見学などのフィールドワーク調査を実施。

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画および研究報告

■国際シンポジウム「議員になれるのは誰なのか？：フランスの政治と議会史からみる立法府のジェンダー化」（2019 年 1 月 21 日）



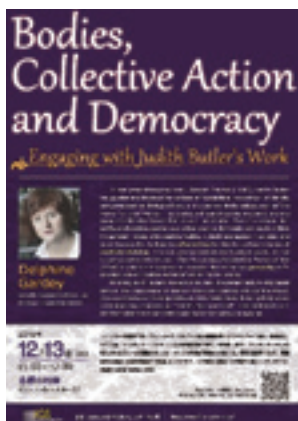
議会民主主義制度が女性を「代表」から排除してきた構造を歴史文化的に検証し、その改善のために導入されているクオータ制度の実効性を分析する内容。ローザンヌ大学のエレオノール・レピナール准教授とガルディ特別招聘教授が基調報告を担当。上智大学の三浦まり教授と、日本学術振興会特別研究員（PD）の村上彩佳氏がコメンテーターを、ジェンダー研究所の申琪榮准教授が司会を務めた。社会制度には、その背後にある文化や思想が反映されていることや、「クオータ」から「パリティ（均等）」というパラダイムシフトが、女性の政治参画の向上に有効であることなどが議論された。



[参照:本報告書 48～50 頁]

3) 大学院生対象の英語によるセミナー講師

■IGS セミナー「主体、社会運動、民主主義：ジュディス・バトラーによる理論構築の検討」（2018 年 12 月 13 日）



共編著書『協調の政治：ジュディス・バトラーと社会運動について考える』を基に、ジェンダー理論、セクシュアリティ理論、身体論、社会運動論等へのジュディス・バトラーの貢献について再考し、それを伸展させて、現代社会における「考える」方法や、「政治的になる」とはどういうことか、フェミニズムを超えた「協調体制」とは、について検討する内容。難解とされることの多いバトラーの理論の発展を追っての解説は、大学院生を中心とする出席者の理論理解を助け、考察を深めさせた。



[参照:本報告書 69～70 頁]

【プロジェクト成果】

2018（平成 30）年度のデルフィーヌ・ガルディ氏招聘は、研究所の特別招聘教授プロジェクトに新しい局面をもたらしたといえる。他の特別招聘教授が、日本を研究フィールドとしているのに対し、ガルディ氏はフランスなど欧州諸国の研究が業績の中心であり、今回の日本滞在は、研究関心のフィールドを日本に伸展させる起点であった。研究面でのサポートは特に準備を要するものであったが、リサーチアシスタントを務めた博士後期課程院生の高橋加織さんが、重要な働きをしてくれた。また、滞在期間は年末年始を挟む 2 ヶ月間と限られていたが、その間に精力的に調査を進め、所内・学内および他大学のジェンダー研究者と交流し、セミナーなどの機会に学生と熱心な議論を交わす研究姿勢や、シンポジウムやセミナーでの、歴史学、社会学、人類学に足場を置く学際的なジェンダー研究の成果の発表は、研究所所属研究者や院生への大きな刺激ともなった。

2019 年 1 月 21 日の国際シンポジウムは、申琪榮准教授との共同企画であった。欧州各国におけるクォータ制度のありようと実効性について研究するエレオノール・レピナール氏と、申准教授の共同研究者である三浦まり氏が登壇する企画は、欧州地域における研究と、申准教授が日本および東アジア地域で進めている女性の政治参画についての研究をつなぐものになったといえる。これにより、それぞれの研究ネットワークをつなぎ、拡充する成果をもたらすことが期待される。また、女性の政治参加を主題に、歴史文化的背景と現代の制度についての報告を並べるプログラム構成は、事象についてのより深い理解をもたらすものであった。これは、本研究所が進めてきた、学際的なジェンダー研究という枠組みならではの成果と認識している。

2018 年 12 月 13 日のセミナーは、理論を主題とするものであった。ジュディス・バトラーによる身体論や存在論の議論は、ジェンダー研究においてとくに重要とされる議論であり、かつ、ジェンダー研究という領域がもたらした学術の発展の代表例のひとつである。これについての理解を深めると同時に、それをどう伸展させられるかという議論をするセミナーは、本学でジェンダー研究に取り組む院生にとって、貴重な学びの場であった。

以上の成果から、本特別招聘教授プロジェクトは、ジェンダー研究という学問分野の意義と、日本における国際的研究教育拠点としての本研究所の存在意義を、再確認する機会になったと理解している。